

山梨県考古学協会2024年度地域大会

二子塚古墳のなぞをさぐる

—中央市に現れた新発見の前方後方墳—

【開催趣旨】

中央市豊富地区の曾根丘陵の台地上にて、前方後方墳である二子塚古墳が発見された。山梨県内では甲府市小平沢古墳に次ぐ2例目である。

なぜ、前方後方という形態を有する古墳が豊富地区で築造されたのか大いなる謎が生まれた。その謎を解く手がかりとして、今回の地域大会では、二子塚古墳が築造されたであろう古墳時代前期の東国社会で前方後方墳がどのように採用され、他の古墳との差別化があったのか、なかったのか。また、山梨の古墳時代前期に築造されてきた多くの古墳の中で、二子塚古墳がどのような位置づけになるのかを考えていく。そして二子塚古墳の調査では、赤色顔料を納めた壺が見つかった。古墳時代人の赤色への意識や二子塚古墳の時期の解明についても探してみたい。



二子塚古墳と王塚古墳

【日時】 2024(令和6)年12月8日(日) 13時00分～16時35分

【場所】 中央市立玉穂生涯学習館

【主催】 山梨県考古学協会 【共催】 中央市教育委員会

【内容】

記念講演	「古墳時代前期の東国と前方後方墳」	日高 慎(東京学芸大学教育学部教授)
報告 1	「二子塚古墳の調査」	今村直樹(中央市教育委員会)
発表 2	「二子塚古墳の壺埋納と赤色顔料」	一之瀬敬一(山梨県立考古博物館)
発表 3	「甲斐の前期古墳と二子塚古墳」	宮澤公雄((公財)山梨文化財研究所)
討論	討論司会 末木 健(中央市文化財保護審議会会長・山梨県考古学協会名誉会長)	

古墳時代前期の東国と前方後方墳

東京学芸大学 日高 慎

2023年、山梨県中央市で今まで知られていなかった前方後方墳が発見された。発掘調査の成果については、報告書の刊行をまたなくてはならないが、二子塚古墳は墳丘長約50mであることが判明し、周囲には幅7～10mの周溝が掘られていた。

山梨県内には、近年再測量された甲府市小平沢古墳という墳丘長53mの前方後方墳がある。前方部は21m、幅22～27mで楕形と思われる、後方は東西37m、南北32mである。従来の測量図では前方部が楕形との認識はなかったが、今回の検討でその可能性が高まった。また、無名墳（米倉山2号墳）は約45mの前方後円墳であり、墳形は前方後方墳となる可能性もある（榎原ほか2024）。二子塚古墳の発見を受け、本発表では東国における前方後円墳あるいは前方後方墳の築造の背景を考えていきたい。その際、築造された場所に注目して考えていく。

表1は、古墳時代前期における関東から東北地域の100mを超える、あるいは100m級の前方後円墳・前方後方墳を集成したものである。香取海を中心に説明した際に作成した表をもとに（日高2015）、記載を都県ごとに変更して、追記・改変した。東京・神奈川は武蔵と相模にわけられることから、多摩川流域・東京湾西岸、相模湾として記載した。それぞれの県では、流域が異なっている場合もあるので、本来領域を分けて記載すべきことは言うまでもないことだが、ひとまず全体的な傾向は分かると思う。

この表をみてわかることは、古墳時代前期において100m超・級の前方後円墳・前方後方墳の数は、千葉・茨城・群馬が非常に多いということである。あとは4～6基という状況である。相模湾は2基、山形は1基と少ない。古墳時代前期の中でも、特に後半期に大規模古墳が築造されているということもわかるだろう。1～2期では8基、3～4期では51基と圧倒的に多くなる。山梨県においても、2期は1基、3～4期では3基と数が多くなることは間違いないの

で、同じような動きを読み取ることができる。このなかでも2期の天神山古墳は、茨城の梵天山古墳の次に大きな古墳であり、100mを超える前方後円墳が数多く築造されている千葉や群馬と比較してもトップクラスの古墳であることは注目しておく必要がある。

前方後方墳でみると、100m級のものは、群馬と栃木に限られ、福島の間津や中通りで80m前後の前方後方墳が前期後半に現れる。中央市二子塚古墳は約50mと墳丘規模こそ中規模ながら、前期後半に築造される前方後方墳との比較検討が必要となる。

一方、中・小規模な前方後方墳や前方後円墳の築造は、それぞれの地域で異なる状況を呈している。表2は古墳時代前期における関東から東北地域の主な中・小規模前方後円墳・前方後方墳を示したものである。詳細が不明なため位置づけられずに削除したのもあるので、実数はもっと多いが、おおまかな傾向は見て取れると思う。

1期についてはいわゆる前方後方形周溝墓とも呼ばれる墳墓が造営された時期である。埼玉、千葉、群馬、福島で数多くの同様な古墳が築造されている。ただし、福島の杵ヶ森古墳、田村山古墳、飯森山古墳、相模湾（神奈川）の秋葉山3号墳、千葉の神門5号・4号・3号墳が前方後円墳であり注目される。一方で、1期に前方後円墳・前方後方墳が存在しない地域として、多摩川流域・東京湾西岸、茨城県、栃木県、山梨県、山形県がある。これらの地域では、方形周溝墓は発見されている場合があり、比較的大きな規模のものもあるが、前方部が独立して存在する墳墓は今のところ確認できない。古墳時代の始まりを考えるときの地域的な古墳受容の違いを表しているのではなかろうか。

首長墓は、なぜその場所に築造されるのだろうか。以前、海岸（内海）沿いに築かれる古墳や海蝕洞穴の墓をめぐる様々な事例を集成して討議をしたことがある（神奈川考古学財団2015）。私は香取海周辺を取り上げて論じたが、太平洋沿岸地域も含めて臨海性

にたけた立地をしている場合が多い。もちろん、内陸に存在する古墳も存在するが、それも河川沿いに展開している場合が多いことを示したのである。

西川修一氏は神奈川県域の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡分布と交通路を検討し、現在の主要国道に沿うように分布しており、それは古代律令国家の官道が敷設されたルートと合致することを明らかにした。前期古墳の分布から、「ひとつは海岸沿いから柏尾川流域を経由し、東方に抜けるルート（A）であり、他方は内陸部を東西に結ぶルート（B）」が存在するとした（西川 1991：p.277）。そして、ルート B は弥生時代には確認できないものであり、古墳築造が弥生時代の地域的土器様式圏を越えるようにして成立したことを示した。さらに「視覚効果のひとつとして幹線路に対しての、古墳の存在の明示・誇示があった」（西川前掲：p.278）とした。

大塚式土器の分布は、甲府盆地の周縁を中心に分布している（柳沼 2013）。流入ルートとしては、後の東海道から甲斐路を通ってくるのか、それとも後世の中道往還あるいは、富士川沿いに遡って入ってくるのか。S字襻の波及について小林健二氏は、信濃を経由する原（古）東山道からのルートと原（東海道）から駿河を経由するルートの両方があったとしている（小林 2024）。いずれにせよ、山梨県内に前方後方墳や前方後円墳が築造される際に、東海西部、東海東部との関わりを考える必要がある。二子塚古墳の調査成果が期待されるゆえんである。

筆者は海浜型前方後円墳を検討した際、その立地には港や津を統括する首長（津長）の存在があったことを示しているとした（日高 2015）。それは内陸における古墳築造についても同様であり、交通の要衝の地に築造されるということなのであろう。交通路との関係を深く考える必要がある。

かながわ考古学財団編 2015『海浜型前方後円墳の時代』同成社

柳原功一・佐藤剛・尾崎昂嗣・中山誠二・望月秀和 2024「山梨県小平沢古墳の測量調査報告」『帝京大学文化財研究所研究報告』22 pp.199-208

小林健二 2024『甲斐における古墳時代地域社会の研究』雄山閣

西川修一 1991「弥生の路・古墳の路」『古代』92 pp.263-289

日高慎 2015「『香取海』沿岸」『海浜型前方後円墳の時代』pp.76-89 同成社

柳沼賢治 2013「大塚式土器の広がり」『駿河における前期古墳の再検討』pp.49-69 静岡県考古学会

表1 古墳時代前期の関東から東北地域の100m超・級前方後円(方)墳一覽

期	相模湾	多摩川流域・東京 高砂原	埼玉	千葉	茨城	群馬	栃木	山梨	福島	宮城	山形	尾数
1				式部郡四所庄(100)	肥前山(160)	朝来入道山(129)	天神山(85)					17
2				東神庄(100)	北大山古室(160)	元長山古室(100)						8(2)
3				早稲田(107)	東山(107)	東山(107)						18(2)
4				東山(107)	東山(107)	東山(107)						33(4)
5				東山(107)	東山(107)	東山(107)						59(8)

表2 古墳時代前期の関東から東北地域の主な中・小規模前方後円(方)墳

期	相模湾	多摩川流域・東京 高砂原	埼玉	千葉	茨城	群馬	栃木	山梨	福島	宮城	山形	尾数
1	秋山1号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						39
2	秋山2号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						3(2)
3	秋山3号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
4	秋山4号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
5	秋山5号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
6	秋山6号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
7	秋山7号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
8	秋山8号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
9	秋山9号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
10	秋山10号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						48
11	秋山11号(50)	相模湾神社(25)	生井1号(21),北谷2号(13)	相模湾1号(25),高砂原2号(25),高砂原3号(25)	神保1号(21),公田1号(20)	神保1号(21),公田1号(20)						178

「古墳時代前期の関東から東北地域の100m超・級前方後円(方)墳一覽」(2015)東北・関東前地方後円墳調査委員会(2015)などをもとに作成。

二子塚古墳の調査

中央市教育委員会 今村直樹

はじめに

中央市大鳥居と高部にまたがる宇山平の台地上には、5世紀後半築造の帆立貝式である王塚古墳を中心に、10基の古墳が点在していたことが、昭和10年実施の古墳現状調査で知られ、宇山平古墳群と呼ばれる。

平成29年度から令和5年度にかけて大鳥居地区で断続的に実施された宇山平地区区営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査では、台地上から古墳6基が検出・調査され、昭和10年の調査成果を裏付けることとなった。

二子塚古墳は令和4年度の調査により発見された古墳の1つで、地元にはその存在は伝わっていたものの形状は不明、墳丘は削平され失われたとされていた古墳である。令和4・5年度調査により明らかとなった古墳の概要を報告する。

古墳の立地

二子塚古墳は甲府盆地の南縁に東西にのびる曾根丘陵が、浅利川と七覚川に挟まれた宇山平と呼ばれる台地上に位置する（標高330m）。古墳は舌状に張り出した平坦地縁辺に主軸を合わせて築造されており、宇山平古墳群の中でも最も盆地寄りになる。西に約100mの地点に位置する王塚古墳とともに眼下に広がる甲府盆地からの眺望を強く意識した選地である。

古墳の概要

二子塚古墳は、前方部を東南東、後方を西北西に向ける前方後方墳で、主軸を北から西へ60度振る前方後方墳である。墳丘の全長は約56m、前方部は長さ26m、端部幅16.5m、くびれ部幅11mの外に向かいやや開くさび形、後方は長さ30m、端部幅28.5m、くびれ部側幅24mの外に向かいやや開く方形の墳丘形態が推定される。周溝の幅は、5.5～12m、深さは最も深い部分で1mを測る。後方の北側1/3ほどは後世の削平を受け、墳丘の立ち上がり、周溝の外側立ち上がりいずれも残っていない。前方部の先端も削平され不明瞭である。後方先端も1/3ほどが削平を受けており墳丘立ち上がりが確認できる

のは部分的である。土層観察では、厚さ約60cmで古墳盛土と思われるロームブロックと暗褐色土が混じる層が確認されたが、主体部は検出されていない。

周溝からは、古墳時代前期のS字甕、二重口緑壺、高環、小型器台の他、縄文土器・弥生土器等が小破片主体で出土している。前方部より後方の方が遺物の出土が多い印象があるが、遺物が特に集中する場は確認できず、周溝内出土遺物の全体量もコンテナ2箱と少ない。前方部南側周溝底部の直径30cmのピット内に埋納されていた赤色顔料（ベンガラ）の詰まった完形の二重口緑壺が唯一の完形品である。

古墳築造前の集落

墳丘下面で弥生・古墳時代住居跡が合計8軒検出された。いずれも古墳築造より前に位置づけられるものである。古墳時代の住居跡は1・4・8・10号の4軒で、4号住居跡は、6.7×5.6mの方形で焼土が床面全体から、炭化材も多く出土する焼失住居で、検出された住居の中でも新しく、古墳築造上限を示すものである。出土したほぼ完形のS字甕は、胴部が球形、肩部の横刷毛がなくなった段階で、4世紀中頃に位置づけられる。住居内で出土した他のS字甕破片も横刷毛のないものが主であり、この段階の住居埋没後、古墳が築造されたことになる。

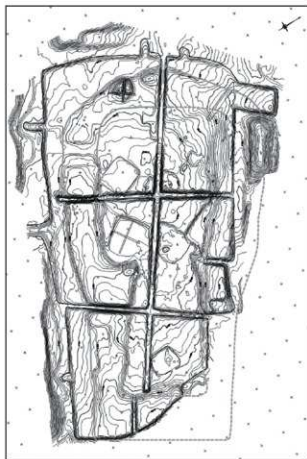
調査の成果

二子塚古墳は前方後方墳として山梨県内では2例目の発見、規模は県内最大であった。時期については4世紀中頃を下限とする住居群の上に古墳を築造しており、周溝からの出土遺物もその時期が中心であることから、住居廃絶後、間もなくして古墳は築造されたと考えられる。

本調査により、隣接する5世紀後半築造の王塚古墳は、当地に突然現れたのではなく、二子塚古墳という前段階があったことが明らかとなった。両古墳間には100年近い時間差があることになり、直接の変遷がたどれるかは不明だが、前方後方墳から前方後円墳という首長墓の系譜をたどることのできる貴重な発見である。



二子塚古墳航空写真



二子塚古墳等高線図



調査された宇山平地区の古墳分布



周溝内ビット出土二重口縁壺



4号住居跡



4号住居跡出土S字甕

二子塚古墳の壺埋納と赤色顔料

山梨県立考古博物館 一之瀬 敬一

はじめに

二子塚古墳からは、前方部南側の周溝の立ち上がりにおいてピットに埋納された二重口緑壺が発見された。この壺は、赤色顔料が詰められており、出土品が少ない二子塚古墳において古墳に伴う可能性が高いものの一つと言える。そのため、二子塚古墳の築造時期や葬送儀礼の内容を考える上で、カギを握る存在といえる。

1 二子塚古墳の壺埋納状況と位置付け

壺は二子塚古墳前方部の南側、その周溝の墳丘外側の立ち上がり部分から出土している。この壺は二重口緑壺などと呼ばれるもので、それ1個が入るだけの小さなピットに、ほぼ完全形で納められていた。二重口緑壺は、土師器の斉一性を語る上で広域的に分布する器種の一つとして古くから注目され、その多様性や広がりなどが広域的な検討の対象となってきた。近年でも、山梨県域の様相などが論及されている（稲垣2014、小林2024）。

二重口緑壺は、赤色顔料の入ったものだけでなく、小破片の形で周溝中から数個体出土している。整理中のため更なる検討を必要とするものの、底部穿孔の存在などから墳墓に伴った可能性が高い。これらは受け部と口縁部の接手法や、口縁部形態などに小差を見いだせるものの、法量や胎土、調整手法などは類似しており、一度に揃えられた可能性が考えられる。ただし、墳丘の削平を考慮しても数は多くはない。壺以外にも破片数は少なく、削平前にもう少し土器の数があったとしても、儀礼後の持ち帰りなどを考慮しなければ土器を用いた儀礼行為については大規模でなかった可能性が高い。

また、赤色顔料が残された壺1個体を除き、ほとんどが原位置を留めていない。そのため、多くは墳丘上などで儀礼的に使用・廃棄され、後の落ち込みや削平などで周囲に散ったものとみられる。

次に、これらを前提に二子塚古墳で用いられた二重

口緑壺を概観する。底部穿孔の認められる個体は管見の限り2点ある。胴部片の出土は少ないが、赤色顔料が残った個体では丁寧に磨かれており、他の個体でも同様の外面へラ磨きが見られる。口縁部付近の破片は数個体分認められ、受け部と口縁部の接合部は一次口縁となる受け部の上に粘土を乗せて形成しているが、受け部を被覆するように形成するものも1点ある。口縁部は赤色顔料の入った資料の様に2~3cm程度、短く外反するものと、それよりやや長く外反するものがある。口唇部はつまみ上げが比較的是っきりしたものとそうではないものの2種があるが、前述の通り全体的な法量や調整等に大きな差は認められない。内外面に赤色顔料が残る破片も若干ながら残存することから、他にも赤色顔料が入っていたか、赤彩されたものも存在していたものと思われる。

甲府盆地の二重口緑壺を用いた墳丘での儀礼については、上野遺跡1号周溝墓、榎田遺跡などに始まり、その後も周溝墓などで主に用いられる（図1）。これらは、周溝墓の平面形態でみたととき、甲府盆地では伝統的な一隅が切れるものではなく、前方後円墳などにも通ずる一辺の中央付近に陸橋を持つタイプで多くの使用が見られる点が注目される。また、前方後円墳でも甲斐天神山古墳で出土が知られている。こうしたものから、本古墳出土品の類例を甲府盆地の中から挙げるとすれば寺部村附第6遺跡11号住居出土品や、桜井畑A遺跡2号墳出土品などを挙げられるだろうか。広域的な位置付けについては今後も議論があると思われるが、甲府盆地の地域編年で見ると小林編年Ⅳ期に位置づけられる資料といえよう。

以上のことから、二子塚古墳の位置する場所は、S字裏に横ハケが消失しつつある小林編年Ⅲ期古段階までは住居が営まれていることから集落として機能し、これらの廃絶後墓域に転換した。二子塚古墳はⅣ期ごろまでに築造および葬送儀礼が行われた前方後方墳であるということが、現時点では理解される。

小林編年Ⅳ期は、甲斐鏡子塚古墳などで埴輪を巡ら

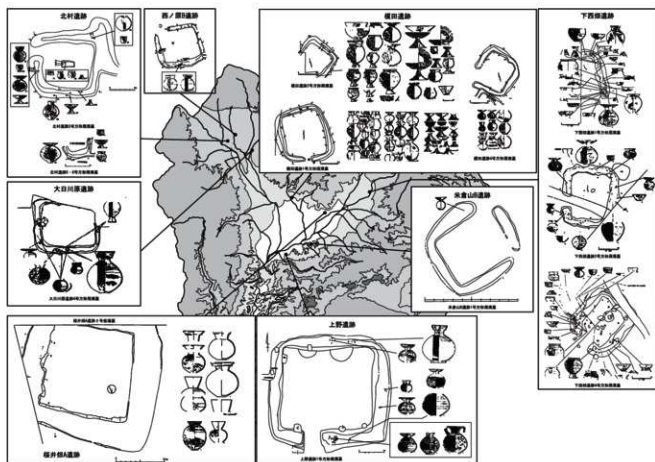


図1 甲府盆地における広義的な二重口緑壺を用いた主な周溝墓

した古墳も出現する時期となる。二子塚古墳の土器を用いた儀礼は、二重口緑壺などを中心としたもので、確かに当地では天神山古墳など前方後円墳にも採用された例があるものの、同時期の周溝墓等で見られるものと使用された器の面では差異が見出しにくい。更に削平されていることを鑑みても、土器類の数は限定的であることを強調したい。

2 二子塚古墳の壺と赤色顔料

赤色顔料は、生命の源泉とも考えられた血液を連想させる赤い色で、魔除けや防腐効果などの意味が込められ、用いられた。

この時期の赤色顔料には水銀朱とベンガラ の 2 種類がある。ベンガラは更にパイプ状の粒子形状を持つか否かで、前者がパイプ状ベンガラ、後者が非パイプ状ベンガラとされる。パイプ状ベンガラは湿地などで採集した水酸化鉄を焼いて得たもの、非パイプ状ベンガラは、赤鉄鉱などを細かく砕いたものとされる。

こうした赤色顔料の用途は、土器などを赤彩すること、埋葬施設内で用いることなどが挙げられる。パレオ・ラボの分析によれば二子塚古墳の壺から発見された赤色顔料については、パイプ状のベンガラとされる。古墳時代前期の甲府盆地ではベンガラの原料とみられる赤鉄鉱が、塩部遺跡（甲府市）や北原遺跡（笛吹市）などで報告されているものの、赤彩などで使用した資料の分析例は少なく、わずかに松ノ尾遺跡出土の大型壺などにパイプ状ベンガラが使われていたことのみが知られている（西願 2015）。

二子塚古墳出土土器の中にも、赤彩の可能性があるものは存在するものの量的には少なく、この壺の赤色顔料は別の用途を想定しうる。そこで、墳丘に何らかの形で廃棄された赤色顔料等を選んだとみられるものの上事例に目をやれば、東日本の古墳時代前期に限定しても、朱・ベンガラともにそれなりの数が挙げられている（志賀 2015）。こうした事例を参考にすれば、二子塚古墳出土例についても、葬送儀礼で用いられた

赤色顔料の残りを、儀礼の終了後廃棄したものである可能性が高い。

この時期の甲府盆地において、赤色顔料を用いた埋葬施設の状況を概観すると、甲斐鏡子塚古墳の竪穴式石椁内の木棺内部は水銀朱が用いられた可能性が高い(小澤 2011)。大丸山古墳の石棺内出土品についても石枕や管玉、ガラス玉などに赤色顔料の付着が認められる。また、岡・鏡子塚古墳出土品については『甲斐国志』の中で朱の記載がある。さらに近年、前期古墳である可能性が指摘される亀甲塚古墳出土品についても、破砕された盤龍鏡に赤色顔料の付着が見られ、棺内は赤色顔料が存在した可能性が高いことが聞き取りの結果、指摘されている(永峯 1950 など)。このように、甲府盆地の古墳前期の古墳では、その種類の如何は別としても棺内に赤色顔料があるのが一般的である。

一方、こうした高塚古墳での検出状況とは異なり、周溝墓などの低墳丘古墳では、その存在は明確でない。近県を見渡せば、植出遺跡(静岡県沼津市)1号周溝墓や、大門遺跡(東京都板橋区)3号周溝墓などでは、赤色顔料の入った壺などの出土を挙げることが可能である。しかし、山梨県内において主体部内で使用されている事例は存在しない(一之瀬 2017)。

これらのことを踏まえると、赤色顔料の使用は「古墳」としての儀礼のやり方の存在を何らかの形で知り、実践することができる存在であると言えるのである。

3 おわりに

この時期の前方後方墳には、二者があるとされる。弥生以来の墳墓における地域的伝統を色濃く残すもの(第1群)と、各地の墳墓様式を集約し生み出されたもの(第2群)である(田中 2011 など)。二子塚古墳については、土器を用いた儀礼でみると第1群的とも言えるし、赤色顔料から見れば第2群的な在り方とも言える。ただし、明らかな第2群の前方後方墳である中道の大形前方後方墳集域から直線距離にして3 km程度の旧豊富地域において築造された二子塚古墳が、これらと無関係とは想像しにくい。

そのため、いわゆる前方後方墳に代表される東海系

の文化やネットワークにアイデンティティを置きつつ、中道古墳群を中心とした秩序下に存在し、かつ析出した一団の墳墓と位置づけられようか。

いずれにせよ、弥生時代後期以降、いわゆる曾根丘陵地帯には現在の笛吹市側から市川三郷町までの各所に様々な遺跡が展開する。一方、「古墳」は中道に集中することがこれまで強調されてきた。ただ、集落や周溝墓からは様々な分節の存在は指摘しうる(一之瀬 2018)。こうした痕跡が比較的少なかった旧豊富村域での二子塚古墳の発見は、今後の更なる発見を予感させるとともに、甲府盆地の地域社会が、単に前方後方墳から前方後円墳へ切り替わるといった順調な見取り図のままで良いのかといった疑問も投げかけている。そのため古墳時代前期東日本でも有力墳が立ち並ぶ当地の社会像をより鮮明にする貴重な発見と言えるだろう。

引用文献一覧

一之瀬敬一 2017 「甲府盆地の周溝墓/低墳丘古墳」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』33

一之瀬敬一 2018 「集落動態から見る甲府盆地の古墳出現前後」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』34

稲垣 自由 2014 「山梨県の榎相」『東生』第3号、東日本古墳確立期土器検討会

永峯 光一 1950 「甲府盆地に於ける古墳出土鏡の新知見」『古代学研究』1 日本古代学会

小澤美和子 2011 「資料調査における遠赤外線撮影の活用—考古資料に用いられた赤色顔料判別の試み」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』27

小林 健二 2024 『甲斐における古墳時代地域社会の研究』雄山閣

西願 麻以 2016 「松ノ尾遺跡出土大赤色壺の科学調査」『松ノ尾遺跡』甲斐市教育委員会

志賀 智史 2016 「城の山古墳出土の赤色顔料」『城の山古墳発掘調査報告書』胎内市教育委員会

田中 裕 2011 「前方後方墳の歴史性」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社

甲斐の前期古墳と二子塚古墳

公益財団法人 山梨文化財研究所 宮澤 公雄

はじめに

中央市大鳥居宇山平に所在する二子塚古墳は、山梨県内2例目となる前方後方墳であった。この古墳の発見は、甲斐の古墳時代の発展過程を考えるうえで、これまでの考え方に對し再考を促すような資料を提示したといえる。

ここでは、これまで想定されてきた古墳時代前期における甲府盆地内の社会状況が、二子塚古墳の発見によってその動向にどのような影響を与えたのかを読み直してみたい。

1 二子塚古墳の築造時期

二子塚古墳は、墳丘が大きく改変されていることもあり、主体部および副葬品は不明である。周溝内から出土した土師器には、S字甕、壺形土器などがある。S字甕は、古墳築造以前に構築されていた古墳時代前期の住居に伴うものも多いため、古墳に伴うものとの分離は容易ではない。壺形土器の中には二重口縁となるものが数点確認されており、竪穴住居に伴うものである可能性もあるものの、底部穿孔壺の破片が数点確認できていることから、これらは古墳に供献された遺物であろう。また、前方部南側の周溝内に掘られた土坑より出土した二重口縁壺は土器内に朱が入っていたこともあり、古墳に伴う確実な例といえる。

甲斐鏡子塚古墳の周溝最下層からはS字甕が出土しており、S字甕変遷を基軸として土師器の編年が構築されている甲府盆地にあっては、古墳の構築年代を知る重要な資料となっている。

二子塚古墳の墳丘下に存在した竪穴住居は、弥生時代後期から古墳時代前期に構築されたもので、古墳の築造はそれ以降ということになる。竪穴住居のうち古墳時代前期の住居跡からS字甕が出土しており、甲斐鏡子塚古墳出土土器と相前後し、二重口縁壺も新しい様相がうかがえ、二子塚古墳の築造時期は、甲斐鏡子塚古墳築造以降ということになる。

2 甲府盆地の前期古墳の発展過程

甲府盆地への古墳文化の流入は、東海地域から富士山の西麓を通る後の中道往還により、右左口峠を越え

た眼下に広がる甲府市(旧中道町)米倉山に前方後方墳である小平沢古墳が築造されたことに始まる。

その後、旧中道町の金沢や東山地域に天神山古墳一丸山古墳一甲斐鏡子塚古墳の順で大形前方後方墳が相次いで築造され、順調に発展を遂げる。

前方後方墳は、濃尾平野を中心にいち早く発達した前方後方墳形墳丘墓に起源をもつとされており、地域内において前方後方墳が最初に築造され、その後前方後方墳へと移行していく例は周辺地域をみても数多く知られる。甲府盆地でも前方後方墳に先がけ小平沢古墳が先行して築造されている。

天神山古墳は全長125mを測る大形の古墳で、内部主体部および副葬品は不明ながら、墳丘より出土した底部穿孔壺形土器などから、甲府盆地で最初に築造された前方後方墳であり、当該期では東日本最大級の規模を誇っている。

次代の首長墓とされるのは丸山古墳であり、全長は99mとも120mともされたが、最新のレーザー測量成果では114mとされる。後円部に上下二重構造の特異な主体部をもち、2体の遺骸とともに三角縁神獣鏡をはじめ、短甲、農具類など豊富な遺物が副葬されていた。その後、眼下の平地に全長169mの大形前方後方墳である甲斐鏡子塚古墳が築かれる。全長6.6mで北枕の竪穴式石室をもち、三角縁神獣鏡2面をはじめとする青銅鏡5面、刀剣類、石製腕飾類などを副葬しており、畿内のな前方後方墳といわれ、本墳も当該期において東日本最大級の古墳である。

甲斐鏡子塚古墳築造以降、中道地域では大形の前方後方墳は築造されることなく、大形円墳である丸山塚古墳や小規模な楕円墳であるかんかん塚古墳の被葬者に首長権は引き継がれる。この時期以降を契機として、峡西地域、御飯・八代地域、やや遅れて豊富・三珠地域など甲府盆地内各地へと古墳が拡散する。

3 豊富・三珠地域勢力の台頭

当該地に古墳が出現するのは、旧三珠地区に所在する鳥居原孤塚古墳とされる。その後、王塚古墳、大塚古墳、三星院古墳などへと引き継がれていったものと思われるが、いずれも前方部が縮小した帆立貝式古墳

である。

鳥居原狐塚古墳は、主体部の詳細は不明ながら、中国の呉の年号である赤烏元年（238年）銘神獸鏡、内行花文鏡が出土している。墳丘の改変が著しく、墳丘は旧状をとどめず墳形は明確ではないが、地中レーダー探査によって、方墳の可能性が高まった。底部穿孔壺が採集されており、形態などから5世紀中頃の築造が想定される。

王塚古墳は二重周溝をもつ全長67mの帆立貝式古墳である。後円部に設けられた主体部は山梨県内で唯一の合掌型石室を有し、副葬品には横刃板鋌留短甲2領・頸鏡・挂甲・眉庇付冑・衝角付冑などが知られる。

大塚古墳は、全長52mほどを測る帆立貝式古墳である。後円部の主体部からは、青銅鏡、大刀などが出土したことが伝えられているが所在不明。発掘調査によって後円部の主体部付近から横刃板鋌留短甲の破片が発見されている。短い前方部上にも竪穴式石室が構築されており、六鈴鏡、管玉、鈴付銅器、大刀、鉄鏃、胡鍬金具、短甲、挂甲小札類、馬具類など多彩な遺物が副葬されていた。近年の発掘調査によって、王塚古墳同様、二重周溝をもつことが確認されており、両古墳が同じ系譜にあることを想定させる。

これらの古墳は、豊富な副葬品をもち、前期以来の在り地勢力とは異なった位置に展開することから、畿内勢力の直接的な地方経営が開始された結果であると考えられよう。

4 二子塚古墳の意義

二子塚古墳は前期古墳の範疇でとらえることができ、現状では当地における最古の古墳となり、当該地における古墳の出現が半世紀以上遡ることとなる。

中道地域では、大形の前方後円墳が相次いで築造されている時期に、当地では前方後方墳が採用されたのはいかなる理由によるものであろうか。

先にふれたように、地域において前方後方墳が先行する例は、東海以東、東北南部に至る地域では顕著な例として認められるのであるが、二子塚古墳が造営されたと思われる4世紀中葉から後葉において、前方後方墳が採用される例は大形墳にはみられるが、類例はそれほど多くはない。一志雲出川、那須、北武蔵、東北南部地域では当該期の前方後方墳が顕著にみられるもの、古墳出現当初より連綿と前方後方墳が卓越して築造され続ける地域であり、甲府盆地の様相とは異なる。また、前方後方墳に先行して前方後円墳が造営

される例も希少である。

このような状況から、中道地域の古墳とは異なる造墓原理によって、豊富・三珠地域に古墳が導入されたと考えられ、両地域は異なる地域勢力によって営まれたものであろう。

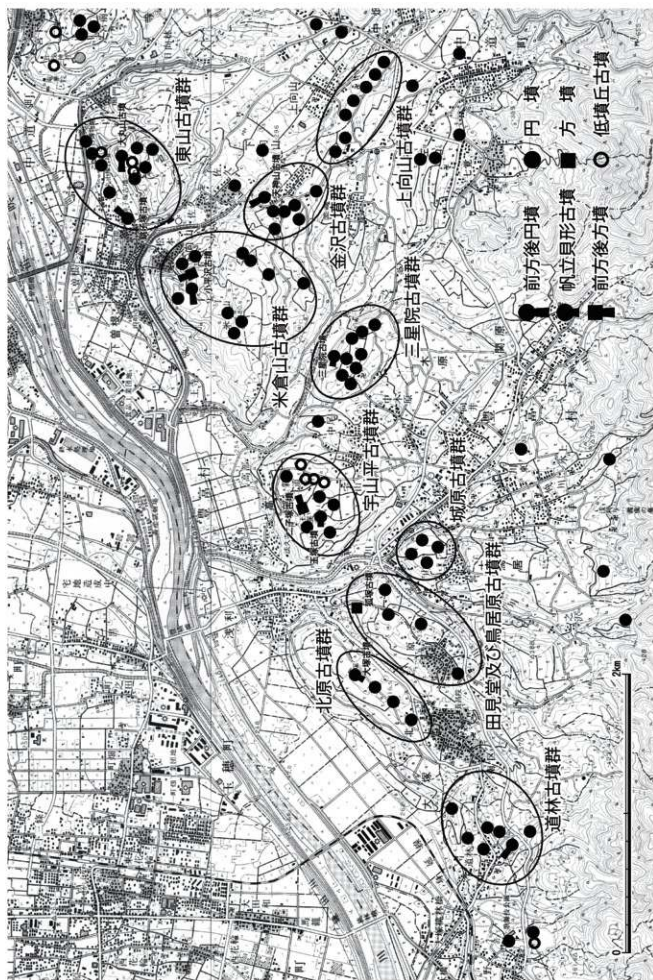
笛吹川に架かる蜚見橋から豊植橋にかけて、橋梁工事の際、地表下7mから10mほどから弥生時代から古墳時代の土器が発見されており、現在の風景とはかなり異なった様相を呈していたと考えられる。おそらく古墳の眼下ならびに前面には集落や水田が広がっており、古墳時代前期の墳墓群は、見せる墳墓として占地していたことになる。二子塚古墳も丘陵縁辺部に占地しており、生活・生産域からの視認性を意識したものととなっている。

二子塚古墳はなぜ前方後方系の墳墓を選択したのであろうか。主体部構造は不明であるが、葺石を葺かず、墳輪も樹立していないなど、前方後円墳の造墓原理に左右されることなく、前時代の墓制を引き継いでいるものといえよう。また、竜塚古墳との関係性も考慮しなければならぬと思われるが、二子塚古墳に続くであろう鳥居原狐塚古墳も方形墳であることから理解できそうである。当地に前方後円系の墳墓が導入されるのは、王塚古墳の登場を待たなければならない。

今後、二子塚古墳の正式報告書が刊行され、詳細が明らかにされることによって、甲府盆地における豊富・三珠地区の地域勢力の位置づけがさらに鮮明にされるはずである。

参考文献

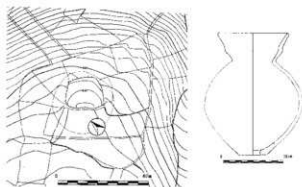
- 今村直樹 2024「二子塚古墳」『山梨考古』第170号
中央市教育委員会 2021『大鳥居山平遺跡』
仁科義男 1931「大塚古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯
仁科義男 1935「東八代郡右左口村豊富村西八代郡大塚村古墳群の調査」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯
宮澤公雄 2011「甲斐曾根丘陵地域における中・後期古墳の様相」『帝京大学文化財研究所研究報告』第15集
山本寿々雄 1960「笛吹川、川床出土の土器（1）」『県立富士国立公園博物館研究報告』第4号
和田豊 1995「三珠町大塚古墳」『帝京大学山梨文化財研究所報』第24号



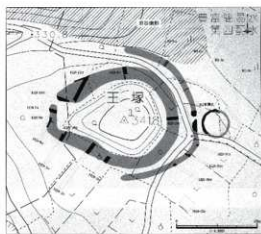
第1図 曾根丘陵西南部主要古墳分布図

新羅時代	中 瀬	境 川	八 代	近畿北・關西	畿内三城	城 西
2 期					上野1号墳	
3 期				藤原1号墳	三城1号墳	
4 期				藤原2号墳	三城2号墳	
5 期				藤原3号墳	三城3号墳	
6 期				藤原4号墳	三城4号墳	
7 期				藤原5号墳	三城5号墳	
8 期				藤原6号墳	三城6号墳	
9 期						

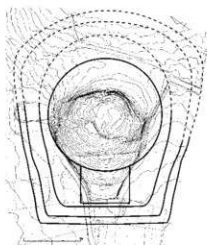
第2図 甲斐の前半期墳墓の分布



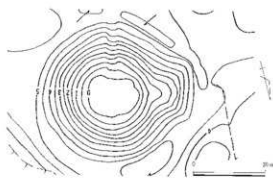
第3図 鳥居原狐塚古墳と土器



第4図 王塚古墳平面図



第5図 大塚古墳推定復元図



第6図 三星院古墳平面図

古墳が密集する宇山平の台地

二子塚古墳のある曾根丘陵の一角、中央市大鳥居・高部に位置する宇山平と呼ばれる台地では、いくつかの古墳が造られ、考古学上、宇山平古墳群と呼ばれています。

昭和10年に山梨県が発行した『史蹟名勝天然記念物調査報告第8輯』には、旧中道町、旧豊富村、旧三珠町の曾根丘陵上にある古墳の分布状況が報告されており、宇山平古墳群には、二子塚古墳（2基の円墳又は前方後円墳と説明）や現在でも墳丘が残る王塚古墳・伊勢塚古墳の他に、調査時より数年前に削平されてしまったものも含めて円墳6基（うち3基は大宇木原の中尾集落寄りにある古墳）が報告されています。昭和の初めころには、この地に古墳がまだ点在していたようです。平成29年度から始まった宇山平地区圃場整備等に伴う発掘調査でも二子塚古墳の他に、小円墳が5基発見されており、横穴式石室の基底部が残っているものもありました。（文責 岡野秀典）



王塚古墳（ぶどう棚設置前）



伊勢塚古墳



3号墳全景（※）



4号墳全景（※）

（※印写真：中央市教育委員会より提供）

山梨考古第 174 号

発行日 2024年12月8日（日）

発行所 山梨県考古学協会

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566

帝京大学文化財研究所内

TEL 055-263-6441

やまなしのこうがく <https://sankoukyou1979.wordpress.com/>

印刷所 峽南堂印刷所

TEL 055-235-2528